

僕と怪物

無名の餅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オグリキャップと出会い、彼女の脚に希望を見せられスカウトしたトレーナー。しばらく経つと互いに関係上持つてはならない恋愛感情があることに気付く。その感情に気付かないフリをするトレーナーに対し積極的になっていくオグリ。恋人か、トレーナーか、どちらを選べば幸せになれるのか。この2人の行く末はどうなってしまうのか

目次

トレーナーとウマ娘	1
心地よい今	6
たづなさんと、どきどきオグリ	10
俺とオグリ、辿る軌跡	21
地方から来た怪物？	25
求める者、応える者	30

トレーナーとウマ娘

ジリリリリリリリ……

けたたましいベルの音で体を起こす。

この音がとても嫌いだった。

これが鳴ると自分の憩いの時間が消える感覚があつて辛かった。

だが、今は存外悪くないと思える

きつと希望が見えたからだ。

朝の準備を終え、気にしていなかった身だしなみを整える。必死にトレーニングメニユーを書き留めたノートも忘れず持つていく。

家から出てすぐの桜並木の道を歩く。そうして進んでいるとぽつんと一人桜を見ながら立ち尽くす見知ったウマ娘がいた。弾む気持ちを抑え声をかける。

「おう、オグリ」

「トレーナー……!!」

「こちらに気づくと長く美しい銀の髪と尻尾を揺らし走って近づく……どころでない!!」

「ちよまつ」

ばたつ

飛び込むように来た彼女の衝撃を抑え込むことはできずそのまま倒れ込んだ。

「……おい」

「…すまないこういうことも多々あるんだ」

「あつてたまるか。誤解されるだろ…早くどいてくれ」

「私は誤解されても構わないぞ」

「俺が誤解されるとクビになっちまう」

「ふふつ、それはまずいな。すぐに退くでしょう」

お互い倒れて服に付いてしまった桜の花びらを払う。

「トレーナー、頭に付いてるぞ。少し屈んでくれ」

言われるとおりに屈むと頭を撫でられた。馬鹿にされているのか俺は

「早く取ってくれ」

「なかなか取れないんだ」

「ばーか」

そこまでして撫でたいものなのか。そんな感情が伝わってくるから照れ隠しで罵倒してやる。多分全てバレているのだが。

上目で確認すると彼女の頭にも桜の花びらが付いていたのがわかった。それを指摘してやると取ってくれなどと言って目を瞑って待っている。なので俺は迷わず花卉をつまんで地に落とす。

「取れたぞ」

「むう」

「むうじゃない。早く行かなきゃ遅刻しちゃうぞ」

「それはトレーナーがいつも遅いからだ」

「……それは本当にごめん」

いつも俺は彼女を待たせているから彼女なりの気苦労があるのだろう。100%察してやれることはできないが代わりに謝罪しておく。

「気にするな。案外君を待つ時間もそう悪くない。好きな人を待つ時間は楽しいものだとトメさんも言っていた。」

「……そうか。」

そこから少しの沈黙、学園まで静かに2人で歩いた。

「私はこっちだ」

「違う。お前はあっち。流石に教室までは自分で行けるようにしとけ」

「……やはり広いな」

「つべこべ言うな。俺はトレーナー室にいるからなんかあつたら呼べよ。」

「ああ、またトレーニングで頼む」

彼女と別れ違う道を歩く。時々振り返ってはこちらを見ている彼女に手を振る事を繰り返す。

そうしてしばらく経つと

「で、あんたら一体いつ付き合うんや?」

いきなり後ろから聞き覚えのある声があった。

「うおっ?!?びつくりさせないでくれよタマモクロス…」

「ははっ! 堪忍な。でもまああんたも早く返事してやらんとあかんで? いい加減オグリが可哀想やないか」

「……わかってるよ。」

「はあ。あんたはトレーナーでオグリはその担当ウマ娘、そこに引いたらあかん一線つてのがあるかもしれないけどな、オグリはそう思つとらん。薄々気付いとるやろ?」

「…彼女の理想に私情を挟むわけにもいかないさ」

「うじうじしとるなあ。別にあんたも断らんつてことは気がないわけやないんやろ? 理事長でもその秘書でも確認とってみればええやん」

「2人とも新レースのことで手がいっぱいなんだ。それこそつちの問題に手を焼かせ

ることはできない。今はこれでいいんだ」

「生真面目なやつぢやな。そんな事言つてたらいつまでもなんもならんで。ま、ウチには関係の無いことやけどな。ほなそろそろ時間まじいからウチは行くで。オグリの面
倒ちやーんと見たつてな」

「それに関しては保証するよ。」

そう言うところにこつと笑いタマモクロスは向こうへパタパタと駆けていった。

「……とりあえず仕事だな」

俺はとことこ歩き、トレーナー室へ向かった

心地よい今

「はあ…」

つい深いため息をこぼす。

「何度見たって…そう書いてんだよなあ…」

この男は一体どうしてこう嘆いているのかーその答えは1冊の学校案内用のパンフレットにあった。

題名は『日本ウマ娘トレーニングセンター学園の心得』

ここにはトレセン学園のモットーや施設の紹介、そして学園の規則等について書かれていた。そのうちのルールの1つとしてこんなものがある。

1ートレセン学園ではトレーナーと担当のウマ娘がそれ以上の関係を持つことを禁止するー

このルールを破るとトレーナーはすぐにこの学園から離れなければならないらしい。ウマ娘の方は何週間かの地域活動や謹慎処分を受けることになるとも書いていた。

「離れたく…ねえもんなあ。」

自分の処遇もだが謹慎になるオグリを見たくはない。しかし…

オグリはきつと俺の事が好きだ。恥ずかしい勘違いの可能性もまだなくはないが今の現状、勘違いである方が全然楽なものも確かだ。

悲しいのはきつと…俺もオグリが好きだからだろう。断るにも断りきれない。彼女の声が、髪が、顔が、耳、尻尾まで全てが愛おしい。この現状をどうにかするには……「…俺はともかくオグリに飽きてもらうしかないだろうな。」

「何をだ？」

「何を……つてそれはおまうおおお!!?」

突然の背後の奇襲（オグリの声）に対応しきれず椅子から転げ落ちた！

「大丈夫かトレーナー!？」

悪かった。必死に考え事をしてきたものだから邪魔しちや悪いと思つて。」

「あー…悪い。そんな気を使わなくていいんだぞ」

「わかった。……それで何を飽きてほしいつて？」

「ん!?!んーそれはなあ……」

「それは？」

まじまじと見つめてきてやりづらい。透き通るくらいキラキラしていて眩しい。

「しよ、そう！食事にな！飽きてもらったら食費が浮くなあ！つて！」

「それは無理だ……」

「だよなー!!ハハハ！」

「ほんとにか?変なトレーナーだな」

「そうか?俺はいつだってこうだぜ!さあ今日はダートコースが多めのトレーニングだぞおー!」

「わかった。」

ふう。正直ホツとした。これから先こういう事が無いようにしなければ……!!

「それと……トレーナー……私聞いてしまったんだが。」

「え……?なに……を?」

もしかして他にも口走っていたことがあったか!?まずい!!

「今言うべきことじゃないかもしれないんだが……」

「……ゴクツ」

唾を飲み込む。この雰囲気は流石になにか言ってる!!!アホか俺は!!!

「な、何を言ってた?」

「さっき私を見て『おまうおー!』って叫んでいたが私はどちらかというとおウマだ。ウマ娘だ。」

「……………ソウダナ」

「ん?どうした?トレーナー凄い顔だぞ。まるで担当のウマ娘が1秒近く出遅れたみた

いな顔をしている。」

「いや…なんでもないさ。…なんでもな。」

自分にとっては心の底からほっとした反面、ものすごくくだらないことを言われてしまったので、その日のダートコースを予定より5周多く走らせたのだった。

たづなさんと、どきどきオグリ

「ここは理事長室の前。」

たづなさんと廊下で会ったので世間話（ウマ娘の話）をしていると少々盛り上がりすぎてしまい熱が上がってきたところで仕事に戻らなければいけない時間になった。そこで

「明日、もつとお話できませんか!？」

と言われたので二つ返事で了承した。

その日のオグリのトレーニング終了後。オグリに声をかける

「明日はミーティングがあるから自主トレを頼むな。この紙に書いてるからしつかりやるんだぞ。」

「急なミーティングだな。」

「ああ、少したづなさんと話してくるから」

「ん?」

「ん?」

さつきまで凛々しい顔をしていたが一瞬できよとんした顔に変わった。しまったな…つい口が滑ってしまった。

「私もついて行く。」

「あほか。」

「何がアホなんだ。」

「たづなさんとはそういうのじゃねえから」

「関係ない。私が行くと言ったら行くんだ。」

「あのなあ……」

「こうしてなんやかんやあつて最終的にはオグリの為だからといった理由でしつしつ納得してもらった。」

「はあ。明日はトレーナーがいないのか……」

寮に戻つてすぐに私は口を開いてしまった。この言葉は同室の親友に聞こえてしま
う

「なんや？あのトレーナー明日はおらんのか？」

「ああ……秘書の人とお出かけに行くらしい。」

「こう言うと彼女は予想外だったらしく声が大きくなった。」

「え!?あんたのトレーナーがたづなさんと!？」

「声がでかいぞ……」

「あー堪忍堪忍。でもそないことがあったんや。…あ、オグリ明日のトレーニングはどうするん」

私はトレーニングメニューが書かれた紙をタマに見せる。

「こりや丁寧なやつちゃな」

「ああ。自慢のトレーナーだ」

「洒落になつとらんわ。……やからか！今日あんたいつもより3割くらいご飯の量少なかつたで!!」

なん…だと!?

確かに今日はご飯を食べながらぼーつとしていた気がする…あんまり量を気にしてなかつたな……つていうかタマはよく見てくれているな…。

「確かにそうかももしれない。タマどうしよう。」

「どしたんや」

「お腹がすいた。」

「……流石に我慢せえや」

その日はそのまま寝ようと思ったのだがなかなか寝付けなかつたのはきつと空腹のせいだろう。うん。

俺はたづなさんとラーメン屋に来ていた。

当初の予定はもつと落ち着いた所にしようかなあと思っていたのだがたづなさんに急な仕事が入った。俺の腹の虫も鳴いてしまい、これを聴きとったたづなさんは気を利かしてラーメン屋に行くことにしてくれた。

「あの時のダービーは凄かったですねえ…三つ巴の戦いが目を離せませんでした…。」

「わかります…自分のオグリにもあんな走りをさせたいもんです…。」

「まあ…ふふふつ」

こんな感じで共通の趣味で話せる相手はありがたい。しかも向こうはかなりのベテランだからすごく頼れる存在だ。分からないところを質問したりあの時のレースは凄かったと感動を共有したりたづなさんが話すウマ娘の裏話もなかなかタメになった。お酒が進んだたづなさんは理事長の暴走癖を少しだけ愚痴っていた。たづなさんの可愛い一面が見れたところで…

「……朝ですね。」

「…ええ。」

朝の7時。オグリに今日は先に行ってくれて連絡しておかねば…。

「連絡ですか？」

「え、ええ…そうですね。毎朝いつも一緒に学園まで行ってるので今日は無理そうだと伝えておかねばと。」

「ふふっ、なかなか見ませんでしたねえ朝から一緒にいるトレーナーとウマ娘は」

「そうですね？」

「ええ。やっぱりお互いプライベートの時間を大事にしてる人が多かった気がします。仲良しと言いますか…かなり愛されてますねえ。」

「思わずその時飲んでいた牛乳をむせてしまった。」

「大丈夫ですか!？」

「げほっ!げほっ!え、ええげほっダイジョブデス。それじゃ今日はここまでにしときましよう!」

「え、ええ。…そうですね!それではまた後で♪」

これ以上はまた口を滑らして何かやってしまうかもしれないなかつたので切り上げることにした。あくびを噛み殺して頑張ろうとしていたたづなさんを見ると俺も頑張ろうって思えた。

あまり眠れなかつた…:朝も早くから目が覚めた。若干寝不足気味だな。

「先に出るよ。タマ。」

まだ寝ぼけているタマに声をかける

「んーまだ7時やで？」

「ああ。朝が昨日から待ちきれなかったんだ。行ってくる」

ブーン

「ひゃっ?!?!」

な、なんだ?……あつスマホか……急に震え出すから苦手だ……。すまない。今日は君を見る気になれないんだ。

「それじゃ、いってきます」

「ん。いってらっさい。また後でな」

そうして、私はいつもの学園の近くの桜並木のあるところへ……おや。

「桜が……散ってしまったな。」

意外と早いんだな……もうお花見が出来ないのは悲しいな……。

そんな事を思いながら数十分。

いつもならそろそろ来るはずだが……

「オグリ!?!」

「トレーナー!!……なんだタマか」

「……悪かったなあトレーナーじゃなくて。……ってそんな事はええねん!もう遅刻ギリギ

リやぞ!？」

「でもトレーナーが…」

「きつとまだ寝とんねん!! 急ぎや!」

「ええ……」

「ええ…ちやうねん! 走るで!!」

「トレーナー……」

やはり私もついていくべきだったか…。

トレーニング時間までに仮眠を取ろうと思ったのだが小1時間寝すぎてしまった…。早く向かわないと…。

急いでトレーニング場に行く可他のウマ娘にタイムを取ってもらっていた。良かった。俺がいなくてももしっかりやれているな。さて…タイムはどうだったんだろうか…。

「2分40秒です。」

それを聞いたオグリはかなり落ち込んだ顔をした

「どうやらダメだったらしい。きつと2000mのタイムだったのだろうかいつもはこんなタイムは出さなはずだ。」

「悪いオグリ、遅れてしまった。」

「!!」

オグリはこちらを見た瞬間物凄いダッシュで近寄りそのまま……

どっかーん

倒れ込んでしまった。この流れ最近多いな。

「おーい。悪かったって。拗ねないでくれ。」

「トレーナー。」

彼女は俺の胸に顔をうずめたまま声を出した。

「どうした？」

「楽しかったか？」

「……ああ。」

耳がピクつと動く。

「私は楽しくなかったぞ。」

あれ……?めっちゃ怒ってる?

尻尾もバサバサ揺れてるし……まるで虫を払うみたいだ

「本当に悪かった。朝まで話してしまってたんだ。」

「それならそれで連絡をくれ。それが無理ならウマ娘としか話さないでくれ。」

そりゃまた酷い……ウマ娘としか話せないのは仕事に影響する。

…ん？

「オグリ、俺連絡入れたよな？」

「なんの事だ。見てないぞ。」

「朝7時くらいに。なんかしてたか？」

「嘘をつくな。その時は既に起きていた。……………あつ」

うずめていた顔を上げて目が合った。

その後すぐに目を逸らして呟いた

「……………スマホは苦手だ。」

「さてはお前見なかったな？」

「うるさいぞ…。大体トレーナーが私とお出かけに行かないのが悪いんだ。」

「ひでえ八つ当たりだなあおい!？」

仕事の合間にトレーナーさんを見に行きました。朝まで付き合わせてしまつて申し訳なかったなあ…。体調とか悪くしてないと良いんですが…？

あら？あらあらあら！…ふふふっ♪

私の目に映るのはトレーナーさんと、その背中にべったりくっついてるウマ娘。

トレーナーさんも幸せ者ですねえ。

今日のお仕事はもつと頑張れそうです。あの二人がこのまま一緒にどこまでも走れますように。そう思ったたづなさんでした。

「オグリさん。」

「なんだ。」

「もう門限なので背中にくつつくのやめて帰ってください。」

「やだ。」

さつきからこの調子だ。既に寮の前まで来てるのに一向に離れようとしなない。

俺の理性が消えないうちに早く行って欲しい。ずっと背中に柔らかい感触が感じられて困っているんだよなあ…

「トレーナー」

「はい。」

「ウマ娘より人の方が好きか」

「…門限だぞ。」

「良いから答えてくれ。」

なんて答えるのが正解なんだ…？

俺の立場上ウマ娘の方が好きなんて言ったら事案だぞ…しかも寮の前だし…通報されちゃうよ…

「正直に答えてくれ。」

……しようがない。

「あまり酷いことを言いたくないが…オグリの方が大事にしているよ」

「!!そうか!そうか!…:…じゃあもつとくつついてて良いよな。」むぎゆー

「おい…。離れてくれ。」

「やあだ。」

この後もくつつくオグリに仕方なくラーメンを奢ることで手を打った。

もちろんそのラーメン屋がたづなさんから教えてもらったことは…当然黙っておいた。

「……まあ良いけど。ちょうど1年前ってことはこの日が選抜レースだったんだな。」

この写真を撮ったのはオグリをスカウトした選抜レースの後だった。カメラマンはタマモクロスをお願いした。本当にこの頃から彼女にはお世話になってるなあ。

「ああ……この頃はまだ少しだけ桜も咲いていたのを覚えているぞ。」

「今年は桜前線みたいなのやつが少し早かったんだっけか。もう散っちゃったな。」

桜並木の道と呼んでいた場所は今はそういうには惜しかった。見上げると緑のカーテンのようになっていた。葉桜から陽光が射している。桜こそ散ってしまったがこの快晴は1年前とは変わらないな。

「トレーナー……覚えているか？この時の自分の一人称を。」

「……お前だつて1年前他のトレーナーからなんて呼ばれてたか覚えてるんだろうな？」

……そう、それはまだ

俺が“僕”で オグリが“怪物”だった時の話だ。

「きよ、今日から俺もトレーナーだ……!!立派なウマ娘をスカウトして育てるんだ……

!!」

これからのトレーナー生活に理想と不安を抱いてトレセン学園までやってきた。するとすぐ近くでベテラントレーナーの2人組が話していたので挨拶がてら話に混じることになった。

そしてしばらく話しているとこんな話題が。

「新入り、地方から来たウマ娘にやあ気をつけとけよ。」

「へ？地方から来たら何かあるんですか？」

正直、俺はそこら辺の知識がほとんど無かった。

「∴地方じゃ負け無しのウマ娘も中央に来た瞬間凡走しか出来ねえことは結構あるんだ。土地勘だったり、他のウマ娘との才能の違いだったりに差をつけられる。戦績だけを見てウマ娘を選ぶような奴にはなるんじゃないぞ。先輩からのアドバイスだ。」

「なるほど。ありがとうございます。」

「頑張れよ！そーういやこの学園にも何人か地方出身のウマ娘つてのがいるんだ。”地方から来た怪物”なんて呼ばれてはいるが地方のウマ娘だ。気になるんなら期待しすぎない程度に見てこい。」

「俺のイチオシはスーパークリークだな！長く使える脚、スパートをかける末脚、レースをしつかり見ることも出来る洞察力、そして何よりでけえあの胸だ。目の保養になるぜ」

2人目の男の人が豪快に笑う。俺もつられて笑った。

「はははっ！胸はともかく気にはしておきます！最も僕みたいな初心者トレーナーにスカウトできるとは思えませんが……」

「なあに、初心者のうちから当たって砕けろの精神をつけとくのは大事な事だけ。気張りな兄弟。」

「はい！ありがとうございます！」

俺は気前のいい2人に軽く会釈してその場を去った。良い話も聞けたし良かった。

「スーパークリーク……スカウトできるかなあ。」

そうは言ったものの心の心の中では地方のウマ娘の話がずっと気になっていて仕方なかった。そんな時……

「……またここに来てしまった。」

銀髪をなびかせた迷子のウマ娘に会ったのだった。

地方から来た怪物？

「……またここに来てしまった。」

出会いというの偶然か、それとも運命か。

そんなことに気づくのはまた少しあとのお話

今大事なのは…そこで困っているウマ娘を助けること。

「どうしたの？」

こちらに気づく名も知らぬウマ娘。

「ああ、この学園のトレーナーか。道に迷ってしまったてな。」

どこまで行くのかと尋ねるとトレーニング場までだと言うので俺はトレーニング場までの道を口で教えてあげた。

「助かる。ありがとう。」

そのままスタスタと去っていったウマ娘

名前くらい聞いとけばよかったかなあと少し後悔しつつも話すのが得意そうには見えなかったので仕方ない！と自らを説得する。……まあ次にあった時にでも聞けばいいか!!

そうしてしばらくその近くで休憩していた。

そしたらなんとさつき見たウマ娘と同じ形容をしている子が同じ場所で困っていた

!!

これが…タイムリープか!?

なんて冗談は置いておきつつ俺はこのウマ娘に不安を覚えた…よっぽどの方向音痴だぞ……

「あの……」

「……君はさつきの。」

「良かったら一緒に行こうか……」

「本当か! 助かる。」

そうして彼女とトレーニング場に行くことにした。

—————

「へえ。オグリキャップさんって言うんだ。」

「ああ。だが大半は私のことをオグリと呼ぶな。」

君もそう呼んでくれて構わない。そう言われたものいきなりの事で気が引けたので妥協してオグリさんと呼ぶことに。折角なので情報収集もおこう。

「オグリさんはスーパークックって子を知ってる？」

「さあ……？知らないな。」

「そうなんだ。じゃあさ。地方から来た怪物は知ってる？」

「チホーカラキタカイブツか……聞いたこともないな……。すまないな。頼りになれなくて。」

「ああ。いいよ良いよ。ほら、トレーニング場が見えてきたよ。」

「むっ、あそこがトレーニング場だな。」

「そうだね。今度こそは本当にそうだね。」

既に3回くらい違うところに向かおうとしていたが、何とかたどり着いた。そこにはオグリさんと同じ銀髪の子がそこに堂々と立っていた。

「おう！オグリー！」

「待たせたな。タマ。」

「いやあ、やっと道を覚えてくれて嬉しいで。ウチもいつもおつてやれるわけちゃうから心を鬼にしたんやけど……正解やったな。」

「道はこのトレーナーに教えてもらった。」

「どうも。」

「つてちよいちよいちよい!!!結局そうなるんかい!!!」

「ごめん…そんな事情があったとは…」

「かまへん。かまへん。知る由もないことや。後でウチががちり教えとくわ。ありがとうな〜」

ウチはタマモクロスや。と手を差し出す。その手を俺は握り返し返事をした。

そうしているとオグリさんがソワソワし始めたのでトレーニングをするのではなかったのかと指摘すると思ひ出したように併走の準備を開始した。

せつかくの機会なので2人のトレーニングを見ることにした。

芝に腰を下ろすと、風が吹いた。芝の上で吹く風ってこんなに気持ちいいんだな。そんなふうにいると今にも併走が始まるうとしていた。

「よっしゃ、行くでえー！よーい……ドンやー!」

その瞬間、風が強くなった気がした。

「は、はやいな……」

2人ともさつきまでのほのぼのした雰囲気から一変、とんでもないスピードで併走を始めた。

こんな子がトレセンにはたくさんいるのか…!!

3周くらいしたところで併走が終わると今日は解散の流れになった。タマモクロスは外を走ってきたがオグリキャップはそこにずっといた。話しかけてみよう。

「お疲れ様。すごかったよ。」

「ああ、君はさっきの。」

彼女はあれだけハイペースな走りをしていても、なお涼しい顔をしていた。

「やはり中央はすごいな。タマみたいなウマ娘が他にもいると思うとドキドキしてくるぞ……。」

………ん？

「やはり中央はすごいって……君、地方から来たの？」

「笠松というところから来た。」

「え………!!」

トレーニング場に、1つ叫びが起きた。

「?何かおかしいのか??タマだつてそうだろう。」

「え………!!!」

トレーニング場に、!!もうひとつ叫びが起きた。

求める者、 応える者

あの2人の併走を見終わってオグリキャップから衝撃の事実を知らされた俺は足早にトレーナー室に行き、考えをまとめることにした。

俺が悩んでいたのは地方から来た怪物がどっちなのかだ。オグリキャップか…タマモクロスカ…。果たして一体…

このままでは埒が明かないな。よし、たづなさんに聞いてみよう！

「地方から来た怪物はオグリキャップさんのことですね。」

はやかったー!!!

俺が悩んでたこと結構しよばかったー!!!

「とゆうか…タマモクロスさんは確か地方のウマ娘ではなかった気が？」

「え……」

勘違いしてるじゃないか…。

とゆうわけで朝から栗東寮の近くで待っていた。

別に俺が言う必要も無いかもしれないが誤解を解いておく必要があると思つた。ちやんと例の2人が仲睦まじそうに出てきたので声をかけ、ついでに前の件の話をした。

「あれ？タマは地方から来たんじゃないのか？」

「ちやうで、なんやあんた勘違いしとつたんか。」

「すまない……何となく同じ空気を感じたからてつきり。」

「なんでやねん。芦毛いうところしか共通点ないやろ。」

なんとかオグリキャップの勘違いを払拭することが出来た。……ああ、後はあれも伝えとかないとな。

「それと、オグリキャップ。実は君が地方から来た怪物らしいんだ。」

「……！そうだったのか！たまに怪物だ……と私の方を見ている人がいた気がしたがどこに怪物がいるのか探していたんだ。……ふふふつ、私だったのか。」

……天然だなあ。

朝から長く話して遅刻させる訳にもいかなかったので今日はこれにて解散。

それよりも気になることが一つ。

地方から来た怪物では、中央のウマ娘には敵わないのか？

本当にオグリキャップは中央で戦えないのか？

どうしても気になった俺は次の選抜レース……オグリキャップとスーパークリークが出るレースの日時を手帳にメモしておいた。

翌日

「ちよつとまってくれ。」

と急に背後から聞こえたので振り向いた。

その先にはオグリキャップが。

「ああ。オグリさん。どうしたの？」

「ここらへんで緑の多いところを探しているんだが……」

「緑が多いところ……ですか」

自然に囲まれる場所……このハイテクな学園にあっただろうか。

確か少し遠いが一応あった気が……地図アプリ使えばわかるか。

ポケットからスマホを取り出して地図アプリを開いた俺をオグリキャップは興味津々に見ていた。

「スマホ使えるのか。すごいな。」

「え？スマホ持っていないの？」

「いや、一応持つてはいるが少し苦手だ。」

「ああ、見るからに使えなさそうですもんね。……あつ、ありましたよ。向こうの方に歩いていったらあるそうです。」

「ありがと……ちよつと待つてくれ。見るからに使えないとはなんだ。」

小言を言われてしまったが聞こえないふりをして目的地へ向かうことにした。

「うん。いい所だ。中央にもちやんとこういった場所はあるのだな。」

オグリキヤップは楽しそうにでこぼこした道を歩いていった。

当の俺は……歩き慣れない道に少しふらふらしていた。

「……大丈夫か？」

「あ、ああ。オグリさんはすごいな。この道かなり不安定じゃないですか？」
「しっかりと道を踏みしめておけば大丈夫だ。」

……すごいパワーだ。これが彼女の武器なのか……んっ？

「オグリさん……」

「ん？なんだ？」

「…あつ、ごめんなさい。やっぱりなんでもないです。」

「…そうか。」

言おうと思つたが伏せておいた。

彼女のシューズ…見るからに彼女自身のパワーに耐えきれないじゃないか…

！

それを見た俺は帰つた後、ショップに来た。

彼女のパワーに耐えられるシューズを選んだ…つて

「アホか俺は。」

好きな色とかはともかく靴のサイズすら分からないのはダメだろ…

諦めて帰ろう…としたその時。

「おお！あん時のトレーナーやん！」

と元気な声で向かってきたウマ娘

「ああ、タマモクロスさんか…どうしたんだ？こんな所で、」

「靴見に来たんや。アンタこそなんしにきたんや？」

「僕は…オグリキャップのシューズを買いおうと思つたんだ。でもやめた。」

「はあ？なんでおんどれがオグリのシューズを？しかもやめたってなんやねん。」

俺は彼女にこれまでの経緯を話した：すると。

「なんや！それならウチに任せとき！ちなみに予算はどれくらいなん？」

と言われたので、手元にある予算を見せると彼女は少し悩んで彼女の特徴について話し出した。

「オグリの足は27.0cmとかやつたはずや。で、スピードが出そうな軽い靴もええけど：どつちかって言うとな必要なのはパワーに耐えられる耐久性の方かもな。ほんまごつつパワーがあるからなあ。」

やつぱり一緒に走るウマ娘の立場としても彼女のパワーはすごいのか：！
軽くて耐久性のあるような靴：：：あつ！

「これかな？」 「これやろ。」

2人で一緒に指を指した。その方向は一点に：同じ靴に向いていた。

何だかおかしくなって顔を見合せ2人で笑った。

「なんや。わかっとなるやん。あいつも喜ぶで。」

こうして、なんだかんだオグリのシューズを買うことができた。

翌日

「オグリさん。これ……」

「これは……シューズだな。くれるのか？」

彼女は少し驚いて聞いてきた。

「この前シューズがかなりボロボロだったことに気づいたんだ。良かったら貰ってくれないか？」

「何故だ？君はまだ私のトレーナーでもないと言うのに。」

なぜ？本当にそうだ。俺はオグリコのトレーナーじゃない。なのに……どうして？

……ああ、そっか。

「君が本気で走るところを見たいんだ。」

「……」

「中央でも勝つところ。皆にも見せてやりたい。」

「……そうか。」

彼女は少し顔を赤らめて呟いた。

「なんだか……懐かしい。温かい気持ちになった。」

「ん？」

「いや、なんでもない。私にも私の走りを見せたい人が地方に沢山いるんだ。……ありがとう。このシューズ、大事に使わせてもらおうよ。」

そう言つてシューズを履き慣らすついでにグラウンドを何周か走ることにした彼女。その目は小さい頃に玩具を買つてもらつた子供のようなキラキラした目をしていて。とても楽しそうに走る彼女を見ていると心が固まった。